刊讀賣新聞　（第3種郵便物認可）



# 日本史アップデート

## 博多港と日宋貿易

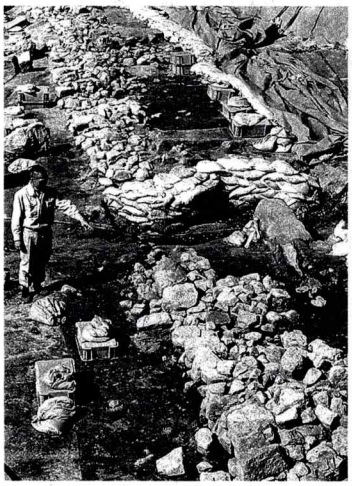
### ここに注目！

・古代日本の玄関口で、平安時代後期に日宋貿易の舞台となった博多港（福岡市）の、最初期の様相を示す石積み遺構が出土した。
・石積みの構造は国内に類例がなく、中国側の貿易拠点だった寧波（ニンポ）の護岸遺構と似ており、貿易を管理する大宰府が、交易の担い手だった中国商人（博多綱首（こうしゅ））に築かせた可能性がある。
・福岡市の発掘調査で、輸出品だった硫黄が出土し、産地も鹿児島県の硫黄島産が主体と特定された。当時の中国では火薬の原料となる硫黄の需要が高く、硫黄を巡る世界的な交易ネットワークの一角を博多港が占めていたと考えられる。

# 「硫黄の道」世界と接点

古代末から中世にかけて国際貿易港として発展し、日宋貿易の拠点となった福岡市の博多港。近年、その様相を示す11世紀後半～12世紀中頃の石積み遺構が出土し、「博多遺跡」として国史跡に指定された。見えてきたのは、アジアをまたいで展開された交易の姿だ。

石積み遺構は商都・博多の中心部に位置し、博多祇園山笠で知られる櫛田神社そばの小学校跡地で見つかった。一帯はかつて遠浅の海岸沿いで、2018～22年の市の発掘調査で、遺構は長さ約70㍍に及ぶことが確認された。街中に姿を現した大規模遺構から読み取れたのは、日宋貿易の担い手で、博多に居住していた「博多綱首」と呼ばれる中国商人の存在だ。



直線状に築かれていた博多遺跡の石積み遺構（2020年撮影）

「海側は自然石を垂直に数段重ね、陸側は小ぶりな石をかみ合わせるように積まれていた。上面は敷石状で、国内に例を見ない石積み技術だった」

発掘調査を担当した福岡市埋蔵文化財課の大庭康時・前課長は振り返る。海外に範囲を広げて調べたところ、日宋貿易の中国側の拠点だった寧波の護岸遺構や、温州の港湾遺跡に構造が似ていることが分かった。

12世紀の文献史料には、この一帯に「博多津唐房（とうぼう）」と呼ばれる〝チャイナタウン〟があったと記されている。実際、石積み遺構の周辺では同時代の中国製陶磁器が集中的に投棄された遺構が複数確認されている。荷主の識別用とみられる「王」「李」「張」といった中国人名が墨書された陶磁器も数千点あり、海路で輸送中に割れた商品を捨てたと考えられる。

博多遺跡周辺で出土した墨書陶磁器。「李」「張」などの中国人の姓が見える（福岡市埋蔵文化財センター蔵）

中国製の瓦、食器、香炉や、中国人通訳の存在を示す木簡も出土した。史料と一連の調査結果を突き合わせると、港湾施設と唐房は一体的に整備され、築造に中国商人が深く関わったことが浮き彫りになった。

大庭さんは「日宋貿易を管理する大宰府は、中国商人に居住地を提供する代わりに、博多港の設営や運営を担わせた」と分析する。遺構の後背地は広場だったことから、交易品の荷揚げやチェック、倉庫に利用されたとみられる。石積みは護岸よりも港湾施設を区画する役割が強かったようだ。

博多遺跡では、国産陶器も多く出土しており、港が対外貿易と国内物流の結節点だったことも明らかになった。輸出品は砂金や水銀が主力と考えられてきたが、近年は硫黄の価値が注目されている。

硫黄は石積み遺構の付近で塊約70点が見つかり、福岡市が産地を分析した結果、鹿児島県の硫黄島の火山に由来するものが主だと判明した。東日本産よりも輸送コストの低い九州産を博多港に集約して輸出していたことがうかがえる。

神戸女子大の山内晋次教授（日本古代・中世国際交流史）は、中国・宋は10世紀後半以降、周辺国との戦いに火器、火薬を用いるようになり、火薬の原料となる硫黄の需要が増大したと指摘する。「火山がほとんど分布しない中国では、宋の時代には、火薬原料としての硫黄の自給は困難で、日宋貿易という形で、火山大国の日本から大量に調達するようになった」と話す。

山内教授によると、宋はこの時期、朝鮮、インドネシア、ペルシャからも硫黄を取り寄せていた。「11～13世紀頃、アジア各地から中国へと一極集中的に流入する〝硫黄の道〟とも呼べる流通ネットワークが形成されていた。博多港はその東端に位置し、流通システムを支えていた」と話す。硫黄の道を介して、日本史はアジア史とつながっていたというわけだ。

石積み遺構や周辺施設は12世紀中頃、洪水で機能を失うが、近くで再整備され、博多港は貿易港として機能し続けた。火薬技術はモンゴル軍にも伝わった。今年は博多を襲った元寇（げんこう）（文永の役）から750年。もしかすると、鎌倉武士を苦しめた火器「てつはう」にも、博多港から渡った硫黄が使われていたかもしれない。

（若林圭輔）

研究成果を反映
改の予定です。

参考文献　大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編『中世都市・博多を掘る』（海鳥社）、山内晋次『日宋貿易と「硫黄の道」』（山川出版社）